

# 時局と國民の覺悟

白鳥 庫吉

自分は大學に於て歴史——特に東洋史を擔任致し平生書物を相手に孜々汲々たる所謂學究の一人であります。古い地味の講義は固より其所なると此には特に『時局と國民』と題して現時の活問題についてお話を敢てするに至つたのは、平素斯ふ云ふ意見を懷抱して居るためであります。

一體我日本には兎角學問と實地とを異つたものゝやうに考へて、學問上の事は學者に任せ實地上の事は實際に當つて居る政治家や實業家に委すべしとし、其間に陰然障壁が設けられ鴻溝が劃せられ繩張が極まつて風馬牛も相及ばざる沒交渉のものとなせらるゝ有様があります。然るに私は之に反して、此通弊を打破し其隔絶を撤去し、實際家は學者の説を仰で之を參考に供し學者は唯死書をのみ取り扱はずに實際の活問題をも捉へて之を研究し、兩々相依り相輔けねばならぬと考へて居るのであります。然らずんば國家が年々歳々巨額の財帑を費し學校を開き學者を養ふの義畢竟無意味に歸せねばなりません。蓋し其趣意は決して學理研究のみにあらずしてまた以て應用に資し社稷を益せんがために相違ありません。されば自分は日露戦争とか支那革命とか朝鮮併合とか若くは今茲の世界的大戰のやうに我國に大關係あ

る事件に對し我々學究の徒と意見を述べざるも當然にして決して潛越ではないと信じ此活問題をとつたわけであります。しかし根が古い事を調べて居る者でございませうからどうしても話す事柄が自分の畑にあるものを多く並べることに陥り易いのは偏へに御恕察を願つて御聽取を請ひたいのでございませう。

今回の大戦争は一方には主として獨逸が立ち之に同民族國の奧太利が加はつたので、謂はゞ獨逸人を一方の勢力として他の歐洲の重立つた國々が皆聯合して之に反對して居るのであります。勿論未だ其戰渦中に巻き込まれざる國なきにしもあらずと雖も、之を全歐の大亂と觀ても少しも差支ない程の大亂であります。しかもそれが歐羅巴の一洲に止らずして極東亞細亞の我大日本帝國すら英國と同盟の關係上此大亂に参加するに至り其他の世界の國々も皆大なる影響を受くるやうになつたのであります。斯の如き開闢以來世界に類例なき程の大事事件が眼前に展開されたるは、一方には實に人類のため悲しむべき事たると同時に他方には我々歴史専門家にとりて興味あるものであります。而して此戦争は範圍も廣く影響も遠いのみならず、其戰鬪の劇烈にして且つ久しきに互れるため其衝に當る國々の悲惨は、古來外敵に蹂躪されしことなき我々日本人の想像以上にいで居るなるべく、我々は僅に新聞雜誌や書籍寫眞を通して其一端を窺ふも酸鼻の極に堪えぬのであります。然るに之に反して我日本帝國にありては、陸には一舉して敵の東洋の根據地青島を改め降し、海には南洋の敵島を占領し且つ英軍と協力して遠く敵の奔竄艦を追討して、東亞の地をして風塵の警を絶ち天下泰平四海安穩の樂土を現出せしめた、是れ因に我

國が地の利を得たる關係もあるが、勿論國體の尊嚴なるに原因して居るのであります。斯う云ふ際に當つて今年は即位禮を行はせられ、又同時に大嘗會の典を擧げさせらるゝと云ふ、實に目出度事が重なるので國內は和氣洋洋として昇平の瑞氣層一層を加ふることあります、之を歐洲の天地の砲煙彈雨に鎖され人民の殺傷饑寒に泣くに比すれば、其差實に霄壤もたゞならぬのであります。

扱て此即位禮竝に大嘗祭につきては種々の考がありますが、要するに日本に於て天皇の天位に即かせ給ふとは、天皇が現神現人神として即ち天祖天照大神の天つ日嗣として寶祚の隆天壤と窮りなかるべき大御位を繼承し、日本國に君臨し給ふを表する義にして、彼の歐洲の帝王が單に其國其時の統治者としての即位とは全然其類を異にして神聖重大の意味がある。又大嘗會は畢竟年々の新嘗祭——即ち歷代の天皇陛下が其大御寶として愛育し給ふ人民のために其生を維く穀物の豐穰を天照大神及他の天神地祇に祈願して穫たる新穀を其神々に供して之を饗し、併せて來る歳の豐穰を祈り給ふ御祭式——の中御即位の初年に當るものが此故を以て特に大嘗會の名を附せられ非常に重大莊嚴に行はせらるゝものである。かく我皇室の始終其臣民を御愛撫なさるゝ御精神は萬般の事物に於て窺ひ知ることが出来るけれども、特に此大嘗祭に於て著しく見えて居る。されば此仁慈の雨露に潤へる我々蒼生も之を以て漫然御馳走を戴く式とのみ暢氣に思ふことなく、眞面目に深く此祭の眞意義に想到し、聖恩の厚大に感謝すると同時に、直接關係の目下の大戦の原因結果竝に戦後早晚必ず來るべき大影響に對して十分の研究を遂げ萬全

の方策を案し、如何なる逆境の來ることあらんも之に處して綽々餘裕ある準備をなし、以て報效の實を擧ぐべきを最も痛切に感ぜねばなりません。是れまた唯今私のやうな學究が斯う云ふ生活問題を提げて此演壇に立ち諸君の清聽を煩すに至つた一動機であります。

現今學問上歐羅巴及び亞細亞を總稱して之をユーロウアジアと申します、本來此二大洲は接續せる一つの大陸にして二つの大陸ではありませぬ。而して此歐亞大陸の強邦中何故今茲の大戦に於て獨逸が最も窮境に立ち我日本が前陳の如く最樂地に在るかを説明し、次に戦後の影響如何を豫想し之に對する準備に論及しようと思ひます。

諸君も御承知の通り歐洲に於て新進の獨逸が大に世界に發展せんとするには、陸の方面に於ては既に大陸軍國たる露西亞、海の方面に於ては大海軍國たる英吉利と云ふ先輩の壓迫を排さねばならぬ、故に獨逸は此兩國の中順次に一國づゝなり、或は已むを得ずんば同時に兩大國に打撃を加へて自分の勢力を世界的に發揮せんと欲する雄圖と決心を懷抱し居りしものが、適々露西亞と同民族にして其下風に立てる塞比亞の青年が獨逸と同盟國にして同民族を主とする外に多種の異民族を混ざるも 澳太利の皇儲を暗殺せしを導火線として斯世界的大戰亂が爆發したのであります。而して其相手たる英吉利が世界最強國の隨一たる所以は無論其文化の優秀なるにもありまじやうが、又其領土の非常に廣大なることが與て大に力あるのです。是は亞弗利加亞米利加濠太利の諸大洲にもありますが我々に最密接の關係ある點から申します

ると其中最も重きを爲す所のものは亞細亞のそれであり、即ち亞細亞に於ては英吉利は古來世界の實庫と稱せられたる後印度を有して居る、又前印度に於ても實際の主權を握つて居り、支那に在つては長江即ち揚子江沿岸の地を勢力範圍として居ります、そして歐羅巴からして日本に到るまでの海路の要所々々は皆英吉利が占領して居るのであります、かく亞細亞の南方諸國を直接間接に其勢力の下に置き居ることが英國の強大を致す所以であります。それから露西亞も亦歐洲に於てそれ自身既に最も大なる土地を占め居るのみならず、それに接續する亞細亞方面に於て一層廣漠なる領地を有して居ります、即ち彼の高加索、土耳其斯坦、西比利亞、北滿洲等殆んど亞細亞の北半部は直接間接に之に屬して居る、是れ露國が文化の點に於て西歐の國々に劣るとも決して優ることがないにも拘らず、傲然として世界に重きをなして居る所以であります。而して亞細亞のこの南北二分的傾向は決して近世此英露二國に分屬せしより始まりしにわらずして、極く、の大昔より既に亞細亞そのものに存したのである、即ち南方は氣候溫暖地味肥沃沿海線長く從て人烟稠密文華燦爛舟戰に長せる大國少からざりしに拘らず、毎に北方互寒不毛の地に住み遊牧騎射の外さしたる能事なき蠻族の侵入征服に苦められざるはなく、而して是等の蠻族も一旦武力により是等の地方を征服して此に都するも、本來文化の劣等にして人口の稀少なる到底彼等の比にわらざれば久しからずして却て被征服者の文明風習に心酔同化せられて文弱の舊套に陥り、終に土人出身の高官其草莽擧兵の徒に顛覆せられ、若くは第二の蠻族の南下に滅ぼさるゝを常としまし

た。支那の滿蒙地方の蠻族に於ける、印度の中央亞細亞のそれに於ける、亞拉比亞回教帝國の土耳其民族に於ける、いづれも此例にもれぬのである。即ち此等古來の大文明國は皆各々其所謂北狄——時代と場所とにより民族若くは其名稱を異にするも——苦争せざりしものはないのである、換言すれば亞細亞大陸の歴史は往古より此南北二元的勢力の對抗消長に外ならぬのである、されば近世に至り其北方は貧にして蠻勇なる歐洲の大陸軍國露西亞の有に歸し南部は富みて文弱なる同しく歐洲の大海軍國英吉利の下に立つに至つたのは決して偶然ではないのである。而して此英露も亦始終亞細亞方面に於て互に相嫉視角逐軋轢争鬪せるは彼等の極東——日本、支那、朝鮮——中央亞細亞及西藏、竝に近東——波斯、土耳其等——に於ける對抗を見れば思半に過ぎるものがありませう。

かく歐亞大陸は南北の二つに割れる素質を有し、北は偏武の陸軍國露西亞之を代表し、南は偏文の海軍國英吉利之を代表する際、此分割線の兩端に立ち其嚮背は此平衡を左右し得べく東に日本西に獨逸が現出したのであります、而して皆文武海陸軍兼備雙秀の偉大なる國家である。我日本は言ふ迄もなく神代の古より今日に至るまで對岸の大陸に幾多の大強國崛起せしも終に彼等の一指をだに染むるを容さざりし金甌無缺の立派な國にして、特に軌近歐米と交通以來僅々五六十年間にわらゆる方面に於て國運の進歩發展は旭日の上るが如く「周雖舊邦命維新」の概がある。又現時の新獨逸帝國も今帝の祖父普魯西王ウキルヘルムが西曆千八百六十六年頃奧太利を破り北日耳曼聯邦を統べしに胚胎し次で同七十一年佛蘭

西を破り終に全日耳曼帝國を創め其皇帝となりしに大成し爾後星霜をふる極めて短しと雖ども其文武二道海陸兩軍の發達共に實に驚くべきものでありまして、之に同民族國の塊太利との同盟を以てし其勢力甚だ強く、此點に於て其地位國情我國と好一對のところがあります。されば東西の此兩國が若し連衡しなばたとひ英露南北強の合従するやらんもなほよく其死命を制することが出來得るならんと思はれます、かくの如く東西の新進日本竝に獨逸が非常に強くなり、其の中間に立てる南北勢力の代表者英露に對立するに至りしは是れ現今ユーロウアジアの大勢であります。故に今度の戦争の始まるや獨逸人は日本は必ず己れに味方して東方より舊敵露西亞の虚をつくらんと信ぜしは強ち無理ならぬことと思はれるのです然るに彼等の豫期に反して我日本は國際問題の徳義、即ち日英同盟日露協商の誼を重んじ却て陸師を出し獨逸の青島に於ける根據地を抜き其遼東半島還附勸告以來の横暴を懲らし、又軍艦を派して英國と協力し或は其南洋の領島を占領し或は遠く其奔竄の軍艦を究追剿討して東洋の海路を安全ならしめ、其上軍需品を露國に供給して其戦闘力を間接にたすけたのである。且つ我國の知己知彼の明ある、羽翼なほ未だ全く成るに至らざる新進の青年を以て老大の兩國を一時に敵とするの不利危険を覺れる既に年久しく彼の日露戦争の如きも英露兩國互に宿敵たるの關係を利用し英と結び其財力及び種々間接の援助を得以て其赫々たる武勳を奏するに便せしめたのである。此英露と争はらせば必ず其一に結ぶの政略は斯の如く往時の日露戦争に成功せし所以にして又此兩國を一時に敵とせざる方針は今茲の戦争に我國が

最も幸福を享け居る理由であるのである。然るに獨逸は之に反して始めは其敵を露西亞とし少くとも英國を局外中立の位地にとゞめ置かんとせしも、其強を自信のあまり功を急ぎ白耳義の中立蹂躪により騎虎の勢英國をも奮起せしめて顧みず隨て其の結果は更に進みて英の同盟國たる我日本をも敵に參加せしめ、爲めに其勢力が東洋より一掃せられしのみならず、敗餘氣死の露國をして兵器を我より得て死灰復た燃え軍容再び振はしむるの失策を演じたのである。即ち此大戦亂の活劇として歐洲の舞臺に演ぜらるゝも其原因する所影響する所共に亞細亞の方にもあるのである。之を要するに獨逸が今般變則アブノールムにも從來相敵視し居りし英露てふ海陸の二大強國竝に其與國を打つて一丸となしたるものを相手にしながら善戰惡闘一步も敵を領内に入れざる武勇と自信とは實に讚嘆の至なれども、これがため包圍攻撃を受け、海陸とも四方を封鎖され、食料物貨の供給に苦心慘憺たる窮境に陥るに至りしは畢竟其外交の拙劣失敗の結果にして若し今一層巧妙にたちはたらき此南北海陸の二大勢力英露を結合せしめなかつたならばこれ程の犠牲を拂ひこれ程の辛酸を嘗めないですんだかも知れない。

此戦争は聯合側の勝利に歸するかはた獨逸側の勝利に歸するか神ならぬ身の豫言を敢てする所にあらずと雖も、いづれにして其結果は漸を逐ふて團結的統一的に赴く世界的趨勢の外に逸脱することはあるまい。即ち小さいものは大きい物に併合される、よりとして歐洲の平和は固まるのである。若し獨逸が敗れば英露二國は益々海陸に手を擴げ我發展に障礙の度を増すことになる。而し此外英國と同文同種の國



にして此戰亂中巨利を博せる亞米利加合衆國は益々富強となり、特に海軍を非常に擴張し我太平洋方面の發展に衝突するの虞がまして來て孤立の地位にたつの恐れがある、たゞ英露の宿仇の再發をまちて其間にうまく立ち廻り權衡上一時の勢力を持たれやうけれども、絶対に彼等を制することが出來難い。又之に反して獨逸が勝たば或は日本に復讐を企つると云ふ厄介の事がありませう、いづれにしても歐洲に於て巴爾幹半島にせよ、白耳義方面にせよ、其小さいものゝ片が着いて了へば、其大強國の勢力發展は抵抗比較的微弱にして、しかも收益多く、且つ未だ片が着かない方面に最も來り易きは言ふまでもなき事である。而して支那竝に前印度方面は實にそれである。而して此西方壓迫の來るは戰後十年か十五年か不明なれど、兎に角近き將來に於て早晚此方面に於て歐米勢力の競争劇甚となるは明なれば此方面に最も近く最も密接痛切の關係ある我日本は今より之に處して慌てず恐れず如何なる事が生ずるも綽々として餘裕あるやう準備をなし素養を積むやう心懸けねばなりません。又泰平の今日より其方法を研究議論すると所謂治に居て亂を忘れざる古哲の格言にも合し、決して不似合不縁起のものではありません。然らば之に處する途如何といはゞ、各方面の人々にそれぞれいろいろの考がありませうが、自分は斯う考へます。

近來まで單に東洋の一小國にして可愛らしい綺麗な國であり優美の人民であるとして歐米に知られた日本が、一躍して世界の列強に伍して重きをなし、彼の傲慢にして光榮ある孤立を自負せし英人をして

之と同盟を敢てせしめしのみならず爾後益々之を鞏固にするに至らしめたのは、種々の原因あるべきも主として先には日清戰爭後には日露戰爭其他團匪事件や今度の青島陷落等によりて我國の戰者必勝攻者必取てふ武方の卓越が廣く認識せられたるによるに外なりませぬ。其上方今の世界にありては國際的問題最後の解決は猶ほ武力によるを免がれませぬから、我國にとりては今後尙一層武力を盛ならしむるの必要は言ふまでもなきことにして、各方面に於て尙武の氣象を養成し、軍需品の製造力を増加し飛行機潛航艇等新式武器の採用を増し其操縦を盛にせねばならぬ。若し日本人にして一朝尙武を忽にするあらんか國家の將來は唯衰頹あらんのみと斷言して憚らぬのであります。即ち此點に於て自分は熱心なる尙武論者であります。

しかしながら日本人は先刻中村<sup>久四</sup>學士御話の蒙古人即ち同く亞細亞に住みながら破壊的蠻勇の點に於て絶群の偉大をあらはせしと、建設的文化に於て觀るべきものなく却て其征服せし南方の弱國に劣ること甚しきが如き偏武の民族とは全然其選を異にして居ります。元來亞細亞大陸の民族は各々文武の一方に偏する傾があつて、先刻申しました通り北方の民族は蒙古人を始め土耳其人其他の民族は武一方に偏したるが故に終に衰頹を來した然るに南方の民族支那印度波斯亞拉比亞及其他昔の國々は文の方に偏したるため所謂各其北狄に數々蹂躪せられた。然るに獨り我日本のみ文武を兼有し、武を有すれども蒙古人等の如く粗暴に流れず文に秀づるも支那人等の如く柔弱に陥らず特有の大和魂の下に此兩者を巧妙

に一致配合せしめて居る、是れ他の亞細亞諸民族の無き所にして到底彼等の企及し難き特長であります。而して歐洲にありては獨逸は單に前陳の如く政治地理上我と東西相比擬すべき地位に在るのみならず、斯文武兩道兼備の點に於ても亦甚だ相類似して居ります。即ち露は武に偏して居る故に文化が低い、英は文に偏す故に武勇に間然する所がある、かく各々其一方に偏することは兩者の弱點缺點たるを免かれない。之に反し獨り獨逸は此通弊に陥らず、文は以て世界に覇を稱するに足り武は一日本を除きて天下之に敵する者が無い、此文武双秀が即ち殆んど全歐洲の諸強を相手として敢て屈せぬ今日の獨逸人を現出せしめた所以であらうと思ふ。されば我日本も一方に尙武の氣象を養成するを要すると同時に他方に非常に文化の發達を獎勵せねばなりません。蓋し文武は相須ち離るべからざるものにして文化の發達は即ち武力を發揮する途であります。例へば現今戰場に盛に使用せらるゝ新武器窒息毒瓦斯の製造及其防禦等の如きは理化學の研究に、又一室に座して世界の大勢を達觀するが如きは歴史地理の通曉に基かざるべからざるを見ても明白のことである。其他文武の進歩平行せずば折角武の方で贏ち得た利益も十分に之を收むることができない、彼の日露の大戦争によりてやうやう我勢力範圍に入れる南滿地方も我人民が其方面の歴史地理地質商業等に暗いため未だ大に之を利用して利益を擧ぐる能はざるが如きは實に其適例である。然るに古來往々「文化の發達は終に衰弱を來たす」との嘆聲あるは畢竟其方法の宜しきを得ざりしたために外ならずして、武力の眞の發揮は必ず文運の進歩に須たざるべからざるも

のであります。

以上陳べました如く獨り武力と密接の關係あるためのみではなく、私は我邦現在の程度に於ては文化そのものの上よりも特に其發達獎勵の必要を最痛切に感ずるのであります。蓋し我大日本は形に於ては古來儼然たる一大獨立國として存在し、且つ今や既に世界列強の一に仲間入りし、其武は露西亞の大を破り獨逸の強に勝ち英吉利の富と結び向ふ所敵無しと雖ども、惜い哉文化の點にいたつては猶ほ獨逸や其他の國々に一籌を輸する所あるを免れない。此度大戰中或は種々の物貨輸入杜絶に苦み、或は新思想源泉の枯竭を杞憂せられしことあるが如きは、實に物質界に於ても精神界に於ても、其文化の獨立猶ほ未だ完全せざるを證するものにあらずして何ぞやである。其他神靈界の事や、道德や教育上の問題に關しても何一つ徹底して居らない、特に其適切の實例は全國に高等學校を七つも八つも設けて主として英獨佛語を教ゆるに三年の長時日を費すことである、蓋しかくせざれば大學に進んで其專攻の學科を修むるに必須なる是等外國語の原書を讀む能はざるがためである、斯様の事は歐洲中何處の國にあるか、是れ畢竟我文化の猶ほ未だ昂然獨歩するに至らずして、他の扶掖誘導を要するものあるを免かれない屈辱の状態を蟬脱する能はざるを明示して餘りあるものである。

さう云ふ譯でありますから尙武の氣象を今より尙ほ一層盛ならしむべきと同時に、精神界の獨立を圖るの必要は一層痛切でござります、而して一日も早く彼等と同等若くは其以上に出るの時來らんことを

心懸けねばなりません。されど是は仲々一朝一夕の能くすべき所ではありません。今日、今日の如き過渡時代にありては後進の我國民は彼の長を採らんが爲めには高等學校を置いて年限がかゝつても必要の外國語をどしどし學習させねばならぬ、然るに漫然日本人の學校生活は外人に比して非常に長しとて無意味に學年短縮論を唱ふる徒の如きは、畢竟方今彼我文化の有様にかやうの差違あるを曉らぬからでありませう。しかし、中學、高等學校、大學と學制全體を見渡し其連絡中に時間の無駄使を發見し之を節約し若くは一層有益に之を用ひんとするが如きは無論宜しいことであります。

又前述の如く日本人は從來兎角分解したがる通弊があつて文と謂へば腐儒視して武と別物とし、學者と謂へば骨董扱して政治家や實業家と没交渉の者と思ひ、専門家と謂へば其の以外何物も知らぬ人と信ぜし舊習を脱し得ないで、現今猶ほ知識と道德とを別範圍のものと思へて、今日は知育のみ盛にして德育の方面を閑却して居ると攻撃する者がある、然れども是皆根本的誤謬であるのみならず、我文化の今は淺くして徹底したる人尠きを反證するものである。蓋し是等は皆互に密接の關係を有しむやみに分解の出来るものでない、特に腦力の働きに於てさうであります、知力がズツト進めば則ち德育も共に進むものであります、彼の佛教を開いた釋迦も耶蘇教を創めた基督も各々印度や猶太に於て其時代の高德たると同時に大知識であつたに相違ござらぬ。然るに方今我國に於ては學問は學問知識は知識といふことにして居るため、其教育は決して眞の知育になつて居らぬ、諸記教育鸚鵡教育卒業教育に過ぎずして

始終學術の虛影をのみ逐ふて走るに止まり毫も眞知識の實を收むるに意を注がぬのである、彼等は單に卒業せんために勉學す故に及第せんため在校の間は注入せられたる學課を鸚鵡的に能く諳記するの苦を忍ぶも、眞に之を理解せんと欲する誠意なければ卒業就職後は舊學を回顧し若くは更に之を發達せしむる勇氣あることなく、自分の受持つて居る事務にのみ齷齪し、唯々位地や俸給の上ると云ふことの外何も考へないから、終に不道德になる者があるのであります。其他最滑稽の例は我國の選舉である、代議士は自分の選んで一國の大政を料理させる人故、其良否は直接に國家及自己の休戚に關係するものなれば、特に注意して自己と同政見の偉人を選び之に相當の敬意を表するが當然なるに、實際は之に反する場合が多い、特に僅少の金錢にて投票を賣り後患を慮らざる等、皆實に知識の徹底せざるために不徳に陥るを見るに足るものであります。之に反して學問そのものに趣味を感じ興味を生ずるやう開發的に教育し行かば始終熱心に勉強し其處で樂み其處で安する故決して不道德の事をやる氣遣はない、換言すれば學問の眞の滋味を感得するやう學彼を教育し行かば、彼等は勇猛精進の心を以てつねに之を追隨し喜し渴仰し終にそこに安心立命の地を見出すに至るのである、つまり眞成の知育は同時に德育となる程密接の關係あるものなれば、彼の今日の教育は知育に偏して德育の方面を缺くとの非難は根本的誤解にして、其實は我國にては眞の知育は未だ行はるゝに至らざるものなれば、隨て德育の效果見えざるは固より當然のことであるのである。

之を要するに前陳の如く適當に文化が進めらるると同時に尙武剛健の氣象をも養成し得可く、決してこれがために國民の勇氣を消耗するものにあらざるは今日の獨逸人が其良き標本である。又道德も文化の進むに隨て進歩すべきものたるは今説いた通りである、なほ他に申上げたき事がいろ／＼ありまするが既に大分時間を経過し後の御方に迷惑をかくる恐ある故すべて之を略し、單に前説の要領を再舉して結末といたします。

即ち我國民は向後一層尙武の氣象を養成發展せしむると同時に文化の進歩獨立を圖らねばならぬ、特に後者は其水平猶ほ頗る低くして歐洲のそれに及ばぬものもある故勇猛精進の大決心を以て其向上昂進をはかるは最緊急必要の事である。而して勿論之と共に國民をして皇室竝に國家と自己との密接なる關係を熟知せしめ、文武を問はず各々自己の立てる方面に於て最善の努力をなし、其個性を發揮するは即ち忠君愛國の徳義たることを曉らしめねばならませぬ、斯の如くして戦後早晩來るべき西方の東漸は如何に猛烈ならんも又は如何なる逆境に立つことあらんも、泰然として驚くなく毅然として屈するなき素養を積むは、上歴代聖天子の御仁慈と、下古來金甌無缺の國體を維持し來りたる祖宗の餘烈とに對して、今日の我々が當然爲すべき事と信ずるのであります（完）



西山拙齋

平生慣著木綿裘 寒暖適身還自由  
錦袖奇溫非我好 莫教高士減風流